2018 年 8 月　　家族の復権?　多様な形態の家族!

映画「娼年」と「家族はつらいよⅢ―妻よ　薔薇のように」と、「万引き家族」の比較を通して

青野　豊一

万引き家族

『崩壊 5 段階説』(ドミートリー・オルロフ　大谷正幸訳　新評論)によれば、社会は次の段階を経て崩壊していく。①金融の崩壊②商業の崩壊③政治の崩壊④社会の崩壊⑤文化の崩壊とされている。①と②は、今の社会経済システムでは、人為では止めようがない。だから、*今なし得ることは、③の段階の崩壊を食い止めるために、それができるような人的資源の育成をすることに意味がある*であろう。これこそが、私たちがしなくてはならないことであろう。

今後の社会では、エネルギーの制約(石油の枯渇)という厳しい事態になることは間違いない。私たちはライフスタイルの変更をしなくてはならない、否応なくパラダイムチェンジに迫られる。だから、私たちは、マスコミ等を通して日々垂れ流しされている情報に溺れることなく、理性を働かせて未来を展望しなくてはならない。そのためには、情報処理能力、編集能力を高めなくてはならない。そして、パラダイムチェンジを図れる人たちを、既成の価値観そのものを置き代えていくことのできる人たちの集まりを、多様に形成しなくてはならない。これが、私たちが意識的に行うべきことであろう。多くの大衆の意識が社会の成り行きに従って変わることを期待しても、それは難しいことである。社会の価値基準を変更していくには、私たちが思考し行動することによってしかありえないのだから、・・・。

さて、この本の中で著者ドミートリー・オルロフが貫いているテーマは、将来の希望的展望として、家族の復権である。家族内と地域社会の物・事・人の互酬交換関係が成立していれば、どのような社会になってもやっていけるであろうという意識で記述されている。はたして、そうであろうか?そもそも、オルロフ氏の言う「家族の復権」とは、どのようなことを意味しているのであろうか。そして、「家族」とは、なんであるのか。オルロフ氏は、どのような家族をイメージしているのであろうか。このことについて思考しないことには、この本に書かれていることの意味がなくなるであろう。

> *動乱と苦悩の日々が始まったのだ。ひとびとは，いまと同じ信条，いまと同　じ制度のもとでみんなが幸せに思えた時代を懐かしむ。どうしてこの信条が非難されねばならないのか。どうしてこの制度が廃止されねばならないのか。ひとびとは，あの幸福な時代こそ社会が隠す悪の原理を助長させたことを理解しようとしない。ひとびとは，人間を責め，神を責め，地球のエネルギー，自然の力を責める。悪の原因を自分の理性や心情には求めない。*

人は自分の主人，自分のライバル，自分の隣人，自分の行為を責める。諸国民は，多数の人口減少によって均衡が回復するまで，そして戦士の遺骨によって平和が戻るまで，互いに武装し合い，殺し合い，根絶し合う。先祖伝来の習慣に手をつけることや，町の開祖がつくり何百年も墨守されてきた法律を改めることを，人類はひどく恐れる。（プルードン『所有とは何か』第一章）

私の思っていることは、家族という形態は、場所と時代により変わっていくものだから、固定観念を強固に抱くことは間違っているのではないか、ということである。戦前のような家族関係に帰ることを期待する保守的な人たちがいるが、これは、大きな間違いなのだ。もう、いまさら、昔には戻れない。だからこそ、自民党はこのような前時代的な家族の在り方を賛美し、社会の一定数の保守的な人たちはこれを夢見ている。山田洋次監督の「家族はつらいよ!」シリーズのような三世代家庭は、どんどん減っていくことであろう。これは当然の事なのだ。昔のように、親と同じ仕事をしたり、同じ土地に若者の仕事があるということは、難しいのだから。地方や田舎ほど、難しいことになる。

現代は、家族という形態が大きく変容して来ている過渡期である、と言えよう。過渡期には、さまざまなタイプの家族が共存している。このうちのどれが良いとも、言えないものであろう。また、日本社会では、まだ多くの世帯が「機能不全家族」となったわけでもない。しかし、情報化により多様なメディアが存在するにも関わらず、だからこそ、人々の間のコミュニケーションの希薄化は進行している。このまま晩婚化、少子化が、そして未婚化が進行すれば、従来の社会的諸関係、そして諸制度は見事に崩壊していくであろう。

要は、私たちの意識が変わらなくてはならない。このような事態に対して、戦前の家族関係への復帰を望んだりする人たちがいるが、この変容に耐えられない人たちが反動としてより一層保守的になっている。そして、自分たちとは異なると思っている人たちに対して排外主義的に、そして差別的言動をする人たちがいる。社会経済の縮小に対していらだち、絶望感を抱き、その不満のはけ口として中国や朝鮮の人たちに向かっている。今の社会のシステムで苦しんでいる人たちがこの自分たちの苦しみの根本原因について思考するのではなくして、自分たちと少しでも異なっていると見なしている人たちを差別する。これは、アメリカのトランプ大統領支持している人たちとよく似た政治信条である。

さて、このような保守化した人たちとは別に、今までの常識ではとても考えられなかったような家族も登場してくるであろう。こうして、社会意識が激しく分裂していくことになる。政治的に左右の対立が、ますます激しくなることになろう。

再度整理しよう。晩婚化、非婚化、そして結婚という形態にとらわれない性的関係のひろがり、同棲関係や婚外の子供の誕生、子供を持たないカップルの増加、中高年の離婚の増加、そして、生殖とセックスがすでに分離しているという現実を、まず認めなくてはならない。これまでの性的分業に支えられた雇用と福祉、そして年金等の社会制度に基づいた近代的家父長的家族が見事に崩れ去っていこうとしているという現実がある。しかしながら、この後に来るであろう新しい家族な

るモノのイメージを確立することができないという激しい動乱の時期になっているということを、私たちは認めなくてはならない。そこで、こうであるべきだなんていう一つの観念に固くとらわれることなく柔軟に、そしてリアルに思考していくことが求められている。

HP 掲載文の目次

Ⅰ—1 映画「娼年」 －2 映画「家族はつらいよⅢ妻よ 薔薇のように」 －3 映画「万引き家族」
Ⅱ—1 昔ながらの家族を懐かしむのでは!? －2 機能不全家族とは? —3 そもそも家族とは?
Ⅲ—1 誰も生まれず、誰も死なない世界を想定してきた近代社会論こそが問題
－2 ケアすることと、ケアされることを、・・・全社会的に支え合う
－3 映画「万引き家族」二回目
Ⅳ—今後の家族?その方向性について、私たちのなすべきことは?
参考資料

見田宗介著作集 1「現代社会の理論」(岩波書店)「現代社会はどこにむかうのか一未来の消失、現代の矛盾」
P.171 「2006 年にある種社会的な話題となった映画「ALWAYS-三丁目の夕日」では、1958 年という、高度経済成長始動期の東京を舞台としている。この映画のほとんどキャッチコピーのように流布した標語は、「人々が未来を信じていた時代」というものであった。「未来を信じる」ということが、過去形で語られている。1958 年と 2006 年という 50 年くらいの間に、日本人の「心あり方」に、見えにくいけれど巨大な転換があった。」
「1950、60、70 年代くらいまでの青年たちにとって、現代よりもずっと素晴らしい未来、よい未来、豊かな未来が必ず来るということは、ほとんど当然の基底感覚であった。それがどのように素晴らしい未来、であるかについて、さまざまなイデオロギーやビジョンが対立し、闘われていた。21 世紀の現在、このような「未来」を信じている青年は、ほとんどいない。人々の生きる世界の感覚の基底の部分に、沈黙の転換はあった。」

昔の結婚とは、家と家との関係であった。それが今は、個人的な事となっている。この大きな変化を認識した上で、考えていこう。日本社会においては、昨今の未婚、晩婚、離婚者の劇的な増加を踏まえ、核家族説に該当しない家族が台頭する可能性がある。国立社会保障・人口問題研究所の「人口統計資料集(2017 年)」によると、2015 年の生涯未婚率は男性が 23.37%、女性は 14.06%である。さらに、H27 年度版厚生労働白書の予測によれば、2035 年には男 29%(約 1/3 の割合)、女 19.2%(約 1/5)と予測されている。こうなると、例えば、様々な理由から従来の結婚や家族の概念にとらわれない者同士が集団で生活し、各グループが家族を自認し、これらが社会現象にまで発展することも考えられるようになる。非婚者たちが集まり一つの家族らしきものを形成することだってありうる。映画「万引き家族」のように、・・・。そうすると、どうなるであろうか。現在法的根拠のない集団でも、家族的な共同体として機能するならば、国家行政も異分子として排除するのではなく、積極的に社会内に認められる仕組みを整備することも考えなくてはならないであろう。核家族がそうであったように、*家族とは時代や社会の影響を受けて変容するものである。だから、昔ながらの家族を懐かしむのは間違っている。この変化を認め、今後の在り方を思考・試行しなくてはならないであろう。*

岡野八代氏の「規範理論における主題としての家族」という論文の注に次のように書かれている。
「多くのフェミニスト理論家が、主流の政治理論における「主体」が自律的個人を想定しており、そのことは、政治的な主体が常に健常者で他者に存していない者、というだけでなく、他者をケアする必要から解放されている意味する、という点について批判している。・・・社会的フェミニストと自称するエルシユテイン(1941-2013 アメリカの政治学者)によれば、「(＊これまでの近代の)契約論は、静的なものの見方である。なぜなら、それは、同意する合理的な成人からなる図を提示するものだから。つまり、誰も生まれず、誰も死なない世界である。子供、老人、病人、死に行く人たちといったケアを必要とする者たちは、どこにも見られない」

このように整理していくと、家族とは自然に形成されるものではなくして、世代・性差・能力、そして出自に大きく異なったものが集まっている社会的な存在であることに気付く。それなのにこの複雑な関係性に注目してこなかったのが、家族内の出来事は社会や国家とは直接には関係しない私的な事として蓋をしてきたのが、これまでの近代社会の建前であった。ここに、問題の根がある。

人間が生きる意味・目的・目標はいろいろあるが、あるたった一つの理由に行き着くと言えよう。それは、人やさまざまな組織(協同体)と結びついた人的関係性を持つことであろう。他の人たちとの結びつき、絆を形成することであろう。愛情であったり、友情であったり、あるいは貢献・奉仕であったり、金銭・物品・名誉等、それらをやり取りすることでより良い関係性を築くことあろう。このことを、忘れてはならない。しかし、従来の家族の関係性が強い毒を放ってきたも忘れてはならない。私たちは、このような家族の功罪を冷徹に見据えなくてはならない。

資本主義経済は、現代日本の社会の隅々までの浸透している。このため、これまでの人的つながりは分断されてきた。現代社会は絆が失われやすい。絆がない人間は狂人になる。狂人があふれる社会が健全なはずはない。教育の場は、この人間関係作りに最適なものでなくてはならないのに、それなのに、日本の教育システムは、いまだに偏差値教育をしており、この現代社会の問題点を理解しようとしていない、そのために見事に狂人を育成する。是正するどころか助長するという最低・最悪のシステムであろう。これは、間違いない。